

## 第17章 スペイン——ナチスは闘い、シオニストは闘わず

ヒトラーもムツソリーニもスペイン内戦がもつインブリケーションを完全に認めて「認識して」いた。左翼が勝利していればファシズムの敵、わけてもドイツとイタリアの労働者を少なからず活気づけていたであろう。二人の独裁者は敏活に動き、ヒトラーは後にレギオン・コンドル（コンドル軍団）の一万四千人の部隊の介入が戦争の帰趨に決定的であったと自慢するようになる。さらに二万五千人のドイツ軍兵士がフランコの戦車軍団・砲兵部隊とともに闘った。イタリアは別に一〇万の「志願兵」を派遣した。共和国派の左翼も外国からかなりの支援を受けた。個々のラディカルは自分でピレネーを越えて労働者民兵部隊に参加した。コミンテルンは四万人の志願から成る国際旅団を組織した（もつとも、けつして全部が共産党員というわけではなかったが）。最後にソヴィエトからも兵員・兵器資材が送り込まれたが、ファシスト国家の物量に比較すればものの数ではなかった。

スペインで闘ったユダヤ人の数については確実なものがない。その中には自らをユダヤ人ではなくラディカルと自覚しているケースが多く、ほとんどがユダヤ人とはみなしていなかった。自らも帰還兵であるアルベルト・プラーゴの慎重な概算によれば、国際旅団の一六パーセントをユダヤ人が占めていたということになり、ひとかたまりに民族集団とみなせば最大集団をなしていた。<sup>(1)</sup> 英国人二千のうち二一四名、一

○・七パーセントがユダヤ系で、ユダヤ系米国人の数は九〇〇〜一二五〇の間で、エイブラハム・リンカーン旅団の三〇パーセントを占めていた。国別に見れば峻厳な反共産主義体制によって亡命生活を強いられていたポーランドの出身者が最も多く、約五千のポーランド人志願兵のうち二二五〇名、四五パーセントがユダヤ系であった。宣伝上の配慮から、旅団は一九三七年にナフタリ・ポトウイン・カンパニーを名乗り、ポーランド人のドンブロウスキ旅団にもイディッシュを話す兵士が二〇〇名いた。ポーランド人の次に多かったのがドイツ人であるが、奇妙なことにエルンスト・テールマン部隊のドイツ・ユダヤ系の人びとの数は不明である。かなりいたことはたしかであろう。

イタリア出身者の中にもユダヤ系が数名いたが、最も有名だったのはカルロ・ロッセツリで、ムツソリーニはロッセツリを亡命者社会の中でも最も危険な分子とみなしていた。共産党員よりもいくぶん早くスペインに馳せ参じたこの無所属リベラルのロッセツリは一三〇名（一部リベラルやトロツキストの一群も含んでいたが、ほとんどはアナキスト）から成るイタリア人初の部隊を編成し、カタロニアのアナルコサンディカリストの陣営で闘った。ムツソリーニは一九三七年六月九日、フランスのファシスト・グループ、カグラール団に、カルロ、ネッロのロッセツリ兄弟をついに暗殺させた。<sup>(2)</sup>

「問題は、なぜ我々が内戦に参加したのかではなく、むしろなぜ参加しなかったのか、である」

内戦が勃発した時、スペインにはパレスティナ出身シオニストが二二名いた。彼らはハポエル、労働シオニスト体操協会のメンバーであった。きたるべきベルリン・オリンピック大会に対するプロテストとしてバルセロナで三六年七月一九日開催されることになっていた労働者オリンピックヤードに参加するために滞

在していたのである。<sup>(3)</sup>バルセロナの兵營における武装蜂起を労働者が粉碎したその戦闘にメンバーのほとんども参加した。<sup>(4)</sup>アルベルト・ブラーゴは闘いに馳せ参じた別の二名のシオニストの名前をあげているが、彼らはいくまで個人的に闘いに加わったのであった。シオニズム運動はパレスティナの成員がスペインに行くのには反対であつただけでなく、またパレスティナのシオニスト日刊紙『ハ・アレツ』にいたつては三七年一月二四日号でリンカーン旅団のアメリカ・ユダヤ兵をパレスティナでの活動をさし措いてスペインで闘っていると非難している。<sup>(5)</sup>しかし、パレスティナのユダヤ人の中にはシオニストの非難を無視してスペインに行つた人びともいた。ただその数のはつきりせず、二六七〇名というのが概数である。一國規模としてはかなり多い数である。<sup>(6)</sup>『シオニズム・イスラエル百科事典』は、その人びとを「約四〇〇名のコミユニスト」としている。<sup>(7)</sup>シオニストの中には個人として動き、そこに含まれる人もいたが、ほとんどすべてはパレスティナ共産党の黨員であつた。

一九七三年にスペインからの帰還兵再会の集いがあり他国出身参加者も招待された。その一人、アメリカ・ユダヤ人のソール・ヴェルマンは、後にこのイベントの最も印象的な事件について記している。それは、彼らがイエルサレムを訪れ、市長のテリー・コレックに会つたときに起こつた。彼らは、アラブ反乱の真つ只中にスペインへ行つたことが正しかつたかどうかを議論してたまさにその時、コレックはこの議論に応えて「問題は、なぜ我々が内戦に参加したのかではなく、なぜ参加しなかつたのか、である」と述べた。

それにはいくつかの理由が存在したが、シオニズム、とりわけ労働シオニズムにそれらはすべて深く根ざしていた。ナチスがフランコ側に決定的にコミットするのが明らかになつたのに、何故シオニストはスペインに向かわなかつたのかをこれらは明らかにするものである。すべてシオニストはユダヤ人問題の解決を自分たちの最重要課題とみなし、ユダヤ・ナシヨナリズムを鮮明に国際的連帯概念に対する対錘にした。労働シオニストほど「赤い同化」をきらつた者はいなかつたであろう。スペイン内戦たけなわの一九三七年、ヒスタドゥルートの日刊紙『ダヴァル』の編集人で労働シオニズム運動の草分け世代のひとつ、ペアル・カツネルソンは「革命的建設主義」と題したパンフレットを草し、改訂派ファシズムに対する党の無気力路線についてしだいに批判を強め、アラブに対する人種主義を増大させていた自陣營の若者たちをまず第一に攻撃した。カツネルソンの論難はマルクス主義のまさに核心——国際主義へも攻撃の矢を向けた。彼は曖昧さを残さぬ調子で若者たちを非難した。

若者たちは自分自身の生活を送つていける能力をもっていない。他人のための生活を送り、他人のための思想を思惟することができにすぎない。何たるいかがわしい愛他主義であることか。我々シオニストのイデオログはつねにこうしたタイプのユダヤ人を告発してきた。国際主義者、反逆者、戦士、ヒーローのふりをするこの革命の仲買人は、自らの属する民族の運命がかかつている決定的なときには実際見下げはてた臆病な気骨のない人間であることが判明する。……この革命の山師はたえず「私の謙虚さ、私の敬虔さを御覧あれ、重要な指針も小さな教訓も革命の教えを全てどれだけ洞察しているか御覧あれ」と乞ひ願う。このような態度がいかに我々の中に瀰漫していることか。また我々が自分自身に誠実であり我々の隣人とまっすぐ進むことがまさに絶対必要なこの時に、いかに危険であることか。<sup>(9)</sup>

名目上労働シオニストは社会主義インターナショナルの一部を構成していたが、彼らにとって労働者の

国際的な連帯とは、パレスティナで彼らを労働者が支持してくれることにほかならなかった。共和国スペインのために少額の援助金を調達したが、公式上は「他の人たちの闘い」のために内戦に参加する行動は誰もとらなかった。一九七三年のスペイン帰還兵会議の席上、「一九三六年、反ユダヤ反乱がパレスティナで起こったときにシオニストやヒスタドゥルトの指導者たちの批判に直面したにもかかわらず」ユダヤ人がスペインへでかけてしまったことは正当化される行為だったか否かという問題がとりあげられたのであるが、まさにスペインで軍の反乱がおこった一九三六年七月にエンツォ・セレーニとモシエ・ペイレソンが出した『パレスティナにおけるユダヤとアラブ』の中の記述をみれば、当時の労働シオニストの考え方がけつして防衛的ではなかったことが明らかである。彼らの野心はパレスティナを征服し、経済的に中東を支配することにあつた。アラブ「反乱」はこうした野望に対抗する当然すぎる反応だったのであり、アラブの野心にユダヤが防衛的に反応したというようなものではなかった。ヒスタドゥルトの一般大衆はスペインに共感を示していたが、シオニストのリーダーたちは、パレスティナに関するその野心ゆえにスペインにおいて国際ファシズムと闘う闘争をその関心から排除してしまつた。スペイン戦争の時期はナチスに対するシオニストの接近がまさに最もナチス寄りになつた時にあたつていた。一九三六年一二月〔パレスティナ〕ナチスがピール委員会の前で自らがシオニスト寄りであることを証明する見返りに、労働シオニストの支配するハガナのほうも親衛隊のためにスパイ情報を提供しようとしていたのである。

シオニスト組織の中でも唯一ハシヨメル・ハツアイルはスペイン革命のより深いインプリケーションをつかもうとしていた。そのメンバーは英独立労働党を説いて親シオニストの態度に転じさせようとかかなり努力を払い、スペインにおけるこの党の友党 POUM = Partido Obrero de Unificación Marxista の運命に寄り添おうとした。スペインにおける人民戦線戦術〔普通の用語は人民戦線戦術〕の政治的挫折はスターリ

ニストおよび社会民主党に対する批判を促すことになつた。しかしハシヨメル・ハツアイルのメンバーがスペインに遠征したことを示す証拠はない。社会的力量においてもそれだけの余力がなかつたことはたしかであるし、POUMのためにパレスティナでわずかな寄付を募る外には少しも闘争支援をおこなつた形跡はない。一九三〇年代を通じてハシヨメルのメンバーは政治生活に参加しなかつたし、パレスティナの外ではユダヤ共同体の諸問題にも首をつっこまなかつた。この点であらゆるシオニスト集団の中でも最も狭い範囲に活動を集中していた組織であつた。スペイン問題についても、さらに重要なファシズム・ナチズム問題についても理論的リーダーシップをとるには程遠く、世界の破局の真只中で孤立主義的ユートピア主義的レトリックを弄する以外には何も提供しえなかつたから、スターリニストやトロツキストに支持者を奪われていたのであつた。

スペインで闘い死んでいったこのユダヤ左翼の勇敢さは、後に「ユダヤ人」が屠殺場に引かれていく羊のようにホロコーストの時代何もしないで殺されたのではないことを証示するために用いられるストーリーになつた。こうした筋を最も熱心に追求したのはシオニストとその後妥協するにいたつた脱スターリニストであつた。彼らは自らの冒険を否定しえない一方、自分たちがスペインで闘つたことを非難するシオニストをまっとうであるということもできないで、むしろ回顧的にスペイン内戦への自らのかわりあいの「民族的」ユダヤ的アスペクトを強調しようとした。そしてそこで闘つた人びとの長い名簿リストの中にユダヤ人を一人ひとり注意深く数えあげてきたのである。スペインに行つた人びとの大多数は、忠実な共産主義者であつたがゆえにスペインに赴いたのであり、ナチズムも単にそのひとつにすぎない多くの問題にぶつかつてラディカルな左翼になつていった。しかし彼らが勇敢だつたからといって、その後のホロコーストに対して「ユダヤ人」が示した反応の仕方もあるものだったということにはならない。共

産主義運動への彼らのかかわりといった事柄以上のものが暗示されるのは、ソヴィエト秘密警察によってP O U Mのリーダーたちが組織的に殺害された場にもそれ相応に「ユダヤ人」がいたということだけである。

スペインにおけるスターリンの犯罪は内戦の一部を構成する不可欠の物語であり、軽視されえない。その問題にもかかわらず、左翼の人びとは国際ファシズムに対する世界的闘争を闘い抜き、死んでいった。それは折しも労働シオニストがパレスティナへアイヒマンをゲストとして迎え、親衛隊のためのスパイ活動を申し出ていた時であった。

## 第18章 自由民主主義政体におけるシオニズムの 反ナチ闘争の敗北

### シオニズムとイギリス・ファシスト同盟

一九三三年のヒトラーの政権掌握以後、西欧においても親ナチ的運動の台頭を見ないところは皆無であったが、その影響の程度は国によって異なっていた。西側資本は、共産主義体制が出現するよりはナチ・ドイツのほうがまだましであるとしていたが、ムッソリーニに比べそれほどヒトラーには支持を与えていなかった。ヒトラーがヴェルサイユ条約に対しあまりにも復讐主義的な態度を示し、ドイツそのものが再び強国になるおそれも強すぎたから、この最も新しい救世主ヒトラーに対する資本家の態度は、ますますはつきりしないものにならざるをえなかったのである。さらにヒトラーの反セム主義は資本家には不人気であった。ユダヤ人が西欧各地の社会でごく小さな分子でしかなければ最終的には同化されると資本家たちは考えていた。東欧からの大量の移民は西欧における反セム主義の息を吹き返させ、英米支配層の間にも五〇年前より偏見は強まっていたが、ヒトラーの極端なレベルにまで達することはなかった。にもかかわらず、イギリスもアメリカも大不況期になると、ユダヤ人社会を肉体的物理的におびやかす、相当な反

叢書・ユニベルシタス 705

# ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著  
芝 健介 訳

